

Title	真心を込めた贈り物：杜甫詩における詩經の典故の意義についての嚴粲の認識
Sub Title	A heartfelt gift : Yan Can interprets Du Fu's Shijing quotations
Author	種村, 和史(Tanemura, Kazufumi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.2 (2022. 12) ,p.18 (239)- 40 (217)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	高橋智教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230002-0018">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230002-0018</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 眞心を込めた贈り物

——杜甫詩における詩經の典故の意義についての嚴粲の認識——

種村 和史

## 1 問題設定

詩經小雅の首篇「鹿鳴」小序に次のようにある。

「鹿鳴」は、よき賓客たる羣臣のために宴を催す詩である。彼らを飲食でもてなすだけではなく、さらに絹織物を竹の小箱に入れて、それによって彼らに對する自分の眞心を贈る。そのようにして後、よき賓客たる忠義の家臣たちは眞心を盡くすことができるのである（鹿鳴、燕羣臣嘉賓也。既飲食之、又實幣帛筐篚以將其厚意、然後忠臣嘉賓得盡其心矣）

これについて、南宋・嚴粲はその詩經注釋書『詩緝』の中で次のように言う。

本詩〔首章〕の中で「人の我を好む、我に周行を示す」と言つて、自分を戒め正し、その至らないところを補つて

くれるよう求めているのが、小序に「心を盡くす」と言うのに當たり、忠義の心をもって何も包み隠すことなく主君に告げることが言う。上の者と下の者との情誼が通じ合っていないければ、よき賓客たる忠義の臣下は眞心を盡くして主君に告げようと思つても、勢いとして兩者の間に分け隔てが生じるために、決してそれが叶わなくなるのである。言わんとすることの重點は「できる（得）」の字にある。「臣下は」必ず宴を開いてもなされるのを待つてその後ではじめてその眞心を盡くすなどと言いたいわけではない。杜甫が「聖人 筐篋の恩、實に邦國の活せんことを欲す」と言うのは、古人の用詩の意を心得たものである（詩中求規益、序所謂盡心、謂忠告無隱也。上下之情不通、則忠臣嘉賓雖欲盡心以告君、而其勢分隔、絶有不可得者。義在得字。非爲必待燕而後盡其心也。杜甫云、聖人筐篋恩、實欲邦國活、得古人用詩之意矣）

嚴粲は「鹿鳴」小序の意味を解説した上で、杜甫がその詩に小序中の語句を用いたのを「古人の用詩の意を得」たものと評價する。ここで引用されている詩は、杜甫の「京より奉先縣に赴く 詠懷五百字（自京赴奉先縣詠懷五百字）」の次の段の詩句である。

形庭所分帛	形庭	分かつ所の帛
本自寒女出	本	寒女より出づ
鞭撻其夫家	其の夫	の家を鞭撻して
聚斂貢城闕	聚斂して	城闕に貢す
聖人筐篋恩	聖人	筐篋の恩
實願邦國活	實に邦國の活せん	ことを願ふ
臣如忽至理	臣	如し至理を忽せにせば

君豈棄此物 君 豈に此の物を棄てんや

多士盈朝廷 多士 朝廷に盈みつるも

仁者宜戰慄<sup>②</sup> 仁者 宜しく戰慄すべし

天寶十四載（七五五）十一月はじめ、安祿山の亂勃發の直前、長安から家族の住む奉先縣（陝西省蒲城）に赴く途中、長安郊外の華清宮を通りかかり、その中で玄宗皇帝が饗宴を催し、集まった大臣たちに引き出物として絹を賜っている情景を想像し、それが庶民から租税として取り立てたものであるのに思いを致して感慨を詠う。

南宋・郭知達撰『九家集注杜詩』の注に「鹿鳴註、又實幣帛筐篚以將其厚意<sup>③</sup>」<sup>④</sup>と言ひ、南宋・黃希、黃鶴撰『補注杜詩』卷二に「洙曰、鹿鳴又實幣帛筐篚以將其厚意<sup>④</sup>」<sup>⑤</sup>は北宋・王洙、九九七―一〇五七、のこと）<sup>⑥</sup>と言うように、「筐篚」の語が「鹿鳴」序を典據とすることは、嚴粲當時常識に屬していた。彼らの注をそのまま杜詩に當て嵌めれば、文王が絹織物を竹の小箱に入れて臣下に賜り、その真心を表したという、うるわしい故實に玄宗は則り、羣臣に絹を下賜するが、それは臣下が職務に精勵し國を活氣づけてくれるようにとの氣持ちに發する、ということになる。嚴粲もまたそのような常識的解釋を踏襲しているようにも見える。しかし、彼が杜甫を「用詩の意を得」たりと評した所以はそれに止まるのであろうか。

「用詩」とは、後世の人間が様々な場面で詩經の詩句を借りて自分の思い、意思、思想を表現する行爲を言う。詩句に詠われた事柄と自分の置かれた状況とを重ね合わせて原詩の意味や含意を生かしながら用いるものから、詩句の原義とは懸け離れた、いわゆる「斷章取義」的用法まで、含まれる範圍は廣い。杜甫が「鹿鳴」序の「筐篚」の語を用いた意圖を右のように理解した場合、もちろんそれも「用詩」の一つの實例ではある。しかし、「古人の用詩の意を得たり」には、杜甫の「用詩」のしかたに何かしら卓越したところを認めている氣配が感じられる。右のような比較的表層的な性格の用詩の例に對してはたしてこのような評語を下すであろうか。嚴粲は、杜甫が「鹿鳴」の作者の意圖を深層まで理解した上で自分の表

現のために生かしたと考えたからこそ、このような稱賛の言を與えたのではないだろうか。

さらに、嚴粲の評語はそれが下される前提を備えている。すなわち、「義は『得』の字に在り。必ず燕を待ちて而して後に其の心を盡くすと爲すに非ざるなり」である。右の理解にはこれが反映されていない。嚴粲の言わんとするところを吟味し、杜詩の引用といかに結びついているかを理解して、はじめてこの評語に込められた意圖を捉えることができる。

以上の問題意識は、次のような小問の複合體として成り立つ。

・嚴粲は「鹿鳴」をいかに解釋したか（これは、杜甫がいかに「鹿鳴」を読み取った、と嚴粲は考えたか、と同じ設問になるだろう）

・嚴粲の「鹿鳴」解釋は、彼以前の解釋と比べていかなる特徴があるか

・嚴粲は、杜甫が「自京……」で「鹿鳴」をいかに用いたと考えたか。とりわけ君主が家臣を歡待することと君臣の義との關係について、何を言わんとしたと考えたか

・嚴粲は、杜甫の「用詩」にどのような優れた特徴があると考えたか

## 2 嚴粲以前の「鹿鳴」解釋の流れ

『詩緝』の「必ず燕を待ちて而して後に其の心を盡くすと爲すに非ざるなり」という言葉には、先人の解釋を念頭に置いて批判を加えている語氣が感じられる。それはいったい誰に向けられたものであろうか。本詩首章、

我有嘉賓 我に嘉賓有り

鼓瑟吹笙 瑟を鼓し笙を吹く

吹笙鼓簧 笙を吹き簧を鼓す

承筐是將 筐ささを承たもげて是れ將わふ

人之好我 人の我を好みすれば

示我周行 我に周れる行を示す

「傳」「筐」とは筐かたみの一種で、幣帛を贈るための容器である。「周」は至れる、「行」は道の意味である。(筐、筐屬、所以行幣帛也。周、至。行、道也)

について、『正義』に次のように言う。

このようにして宴の食事によって彼らをもてなし、瑟や笙の音楽によって彼らを樂しませ、幣帛を彼らに贈る。だからよき賓客はみな私を愛し好んでくれる。このようにして賓客を敬つてこそ、はじめて彼らは眞心を私に獻げ、私に先王のこの上もない素晴らしい道を示してくれる(由此燕食以享之、瑟笙以樂之、幣帛以將之、故嘉賓皆愛好我。以敬賓如是、乃輪誠矣、示我以先王至美之道也)

文王の臣下は、食事や音楽および幣帛による丁寧なもてなしを受けたことにより(「故に」、文王に對する親愛の念を抱き、そうしてようやく(「乃ち」)文王に至美の道を示してくれると説明する。「乃ち」という文字に注目したい。主君の饗應に對する返報として、臣下は君主に誠心を獻げる、具體的には主君に「先王の至美の道」を示すのである。君臣關係が、ここでは物質を介したギブアンドテイクの關係、ドライな交換原理に基づくものとして捉えられている。

これは「我に周行を示す」についての魏・王肅による次の説明に従ったものである。

王肅は毛傳の言わんとするところを敷衍して次のように言う——「羣臣」は「嘉賓」のことである。そもそも飲食によつて彼らをもてなし、瑟や笙によつて彼らを樂しませ、幣帛を彼らに贈れば、私を好み愛してもらうことができ、私

を好み愛してくれば、私にこの上ないうるわしい道を示してくれる（王肅述毛云、謂羣臣嘉賓也。夫飲食以享之、瑟笙以樂之、幣帛以將之、則能好愛我、好愛我、則示我以至美之道矣）

王肅は「則」という接續詞を用い、君主が臣下をもてなす、臣下が君主に對して親愛感を抱く、臣下が至美の道を君主に示す、の各行爲を因果關係で結ぶ。臣下の君主に對する忠義の實踐をやはり交換原理のもとに捉えている。

王肅にとつて鄭玄の詩經解釋は基本的に批判の對象であつたが、この問題に關しては兩者の認識にそれほど違いはない。本詩卒章の鄭箋に次のように言う。

そもそも彼が楽しむことを實現させなければ、彼の志を手に入れることはできない。彼の志を得ることができなければ、よき賓客はその力を出し盡くすことはできない（夫不能致其樂則不能得其志。不能得其志則嘉賓不能竭其力）

鄭玄は條件と歸結を連ねて説明しており、賓客である羣臣に忠義を盡くさせることを目的として彼を樂しませるといふ構圖を示している。

このように、鄭玄・王肅・疏家は、いずれも君主の臣下に對する手厚いもてなしと臣下の主君に對する忠誠と盡力とを交換原理によつて捉える。これは『詩緝』に言う「必ず燕を待ちて而して後に其の心を盡くすと爲す」に當たる。ここから、嚴粲の批判が漢唐詩經學の解釋に向けたものであることがわかる。

次に、嚴粲以前の宋代の諸家はどのように解釋してあるだろうか。代表として北宋の王安石と蘇轍、南宋の朱熹を取り上げる。王安石『詩經新義』（以下、『新義』と略稱）に次のように言う。

「周」とは忠信の意味の「周」である。<sup>(5)</sup>「行」とは道である。彼（文王）に忠信の道を示してくれることを言う（周爲

忠信之周。行、道也。言示之忠信之道。

蘇轍『詩集傳』に次のように言う。

私にはよき賓客がいて、禮樂によつて彼らをもてなす。打ち解けた雰圍氣で彼らに存分に歡び楽しんでもらい、ヨモギ 食べる鹿のように満足してもらう。そうすれば、忠信の道を私に示そうと思うだろう。忠信とはそれを得たいと願うことはできるが、無理やり手に入れることはできないのである（我有嘉賓而禮樂以燕之。從容以盡其歡、使其自得如鹿之食苹、則夫思以忠信之道示我矣。忠信者可以其願得之而不可以強取也）

王安石と蘇轍は、もてなしを受けた臣下が文王に示すのを「忠信の道」とすることが一致している。王肅や『正義』のように、臣下が文王に先王の至美の道、理想的な政の道を示す、教え諭すのではなく、文王に忠義を盡くすと捉えている。この點は、「志を得」「其の力を竭くす」と解する鄭玄の説に近い。王安石の解釋についてはそれ以上は不明であるが、『蘇傳』は、臣下が忠義を盡くしてくれることを「願」つて文王は宴を催すと考えている。文王の歡待と臣下の忠義を交換原理で捉えている點で、漢唐詩經學と同様である。

朱熹『集傳』に次のように言う。

思うに君臣の分は嚴しさを主體とし、朝廷の禮は敬いを主體とする。しかしながら嚴しさと敬いの一點張りでは、あるいは情が通じ合わなくなり、忠告によつて主君を補佐する役目を全うする術がなくなつてしまふかもしれない。故に、先王は彼らを飲食でもてなす集を開き、饗宴の儀禮を制度として作り、それによつて上下の情を通じさせ、その樂歌はさらに鹿が鳴き交わす情景によつて興を起こして、その禮の心がこれほどまでに厚いことを詠う。人々が自分を



好んでくれ、私に大いなる道を示してくれるよう心から願う（蓋君臣之分以嚴爲主。朝廷之禮以敬爲主。然一於嚴敬、則情或不通、而無以盡其忠告之益。故先王因其飲食聚會、而制爲燕饗之禮、以通上下之情、而其樂歌又以鹿鳴起興、而言禮意之厚如此。庶乎人之好我、而示我以大道也）

朱熹は君臣關係を、漢唐詩經學のように功利的かつ雙務的なものとしてではなく、儼然たる支配―被支配の片務的關係で捉え、その原理を嚴と禮に求める。ただし、嚴と禮だけでは關係が硬直化し、家臣は正しい政を實現するために必要な忠告を君主にするのを躊躇うようになってしまう恐れがある。それを防ぐために、文王は家臣のために宴を設け、彼らとの心の交流を圖るのだと説明している。

朱熹は、王肅や疏家のように君臣關係を交換原理に基づくものではなく、絶對的な身分秩序と捉え、それに伴い設宴の目的も、關係の硬直性から生じる弊害を回避することに移行させ、臣下の心理をコントロールするための手段、一種の方便として捉えている。

さらに朱熹は、設宴の效用として文王が臣下に期待するのを「其の忠告の益を盡くす」という言論行動に焦點化している。「先王之至美の道を示す」という漢唐詩經學、「忠信の道を示す」という王安石・蘇轍よりもより具體的で實踐的なものになっている。

以上、漢唐詩經學から朱熹までの認識を概観したが、宴が特定の目的意識を持って開かれると考える點は、いずれにも共通する。ただし、君主が臣下に求めるものが抽象的あるいは漠然としたものから、朱熹に至り忠告という行為に具體化している。

### 3 嚴粲の「鹿鳴」解釋の特徴

嚴粲は小序の「然る後 忠臣嘉賓其の心を盡くすを得」の「得」字を重視する。「得」の有無によって、小序の意味はど

のように変わるだろうか。「得」の字を無視して「然る後 忠臣嘉賓其の心を盡くす」で考えた場合、臣下は君主からの手厚いもてなしを受けたことにより忠義を盡くすことになる。忠義心はもてなしの対價であり、もてなしに満足するまでは君主への思いは、少なくとも「盡くす」と言えるほど充分には育っていない。

一方、「然る後 忠臣嘉賓其の心を盡くすを得」の「得」の字を重視した場合、忠義の心自體は饗應の有無に關わらず存在しているのだが、臣下は君主の手厚いもてなしを受けたことにより、その忠義心を実際の行動の上に存分に發揮できるということになる。この場合、君臣間には平生から相互の親愛感が醸成されている。文王が宴を催し引き出物を下賜するのは、家臣を愛する心の自然の發露であり、彼らが歡樂する姿を見て自分も満足したいという思いに發する。臣下も宴によって君主の自分に對する親愛の情を實感し心安じるのである。漢唐詩經學に比べて、嚴粲は君臣の心情の日常的な交流を重視している。

このような嚴粲の解釋には基づくところがある。それは、『李迂仲黃實夫毛詩集解』<sup>(6)</sup>の本詩注釋に見える、南宋・黃樾の次の解釋である。

詩經「鹿鳴」を讀むに及び、その序もまた「既に之に飲食せしめ、又た幣帛を筐篋に實れて以て其の厚意を將り、然る後に忠臣嘉賓其の心を盡くすを得」と言う。ということは、君主たる者が臣下に對して飲食でもてなし、竹の小箱に絹織物を入れて贈ることができれば、臣下たる者もまたその心を盡くすことができるのだろうか……私はかつて何度もこの序を讀み返し、はじめのうちはこれを疑い、最後には悟って、序の撰者の意圖は「其の心を盡くすを得」という一句に込められていると考えるようになった。君臣の間柄が心を開き誠を表し、互いに深く親愛し篤く信頼し合つて、その後忠臣は自分が行おうと思つていることを存分に行うことができる。君臣の間に齟齬があり、信頼感がなければ、上下は相憚り、安心感を持ってなくなり、天下の利害を考える餘裕は失われる。そうなれば、その心を盡くそうとしてもできなくなってしまうのである。文王のその臣下への對し方は、彼らを心の底から親愛し、この上なく丁重にもてなし

た。儀禮を盡くせば盡くすほど心に飽き足りないようであった……したがって、文王はどうして區區たる飲食、絹織物、聲樂などで賢者をもてなせば充分だなどと思つたのだろうか（及讀詩鹿鳴而其序亦曰、既飲食之、又實幣帛筐篚以將其厚意、然後忠臣嘉賓得盡其心。然則爲之君者苟能待之飲食、實之以筐篚、則爲之臣者亦可以盡其心邪……予嘗三復此序、始而疑、終而悟。以爲序者之意在於得盡其心之一句。君臣之間開心見誠、相好之深、相信之篤、而後忠臣得以盡其所欲爲。苟君臣相與齟齬而不相信、上下相顧鰓鰓而不能以自安、而何暇及天下之利害、是雖欲盡其心、有不可得者。文王之待其臣也、好之之篤而待之之至。禮愈盡而心不能以自足……然文王豈以區區之飲食幣帛聲樂爲足以待賢哉）

黄樞は「序者の意は『其の心を盡くすを得』の一句に在り」と言う。また、君主と家臣の間に深い親愛の念、篤い信頼感があるということが、臣下が心安らかに自分の職分を盡くすことができるための必須条件であるとす。文王が家臣を手厚くもてなすのは、臣下に抱く親愛・信頼の心が自然に發揮されたもので、何かの見返りを求めて行われたものではないと考へている。これは嚴粲と同じであり、兩者に説の繼承関係があることがわかる。

ただし、嚴粲の注釋には黄樞が言及しない要素も含まれている。一つは、家臣が君主に「心を盡く」すのが具體的にどのような動作に表されるかについて、黄樞は説明をしないのに對して、嚴粲は第一節に引いた小序『詩緝』に、「心を盡くす」とは、忠告して隱す無し」と言い、首章『詩緝』で、

私にはこのよき賓客がいる……真情と禮節とが調和し、喜ばしく楽しい氣持ちが交流し合う。この人が私を好ましく愛すべきと思つてくれ、私に大いなる道を教え示してくれることを心から願う。私に告げてくれることを私への親愛ゆえだとするのは、つまり道が人に言わしめるのだ。（『儀禮』「鄉射禮」に據れば）「宴會の儀禮は禮樂完備してはじめて語り合うことができる」と言うように、（宴を催すのは）下情に通じることで自分の行いを規範付け自分に益をもたらしてくれることを求めるためなのであり、どうして飲酒に耽り樂しむなどということがあろうか（我有此嘉賓……情文

相稱。驩欣交通。庶乎人之好愛我者、示我以大道矣。以告我者爲相愛、蓋道之使言也。燕禮於旅也語、所以通下情求規益。豈曰耽樂飲酒乎哉。

と言い、「忠告す」、「告げる」「言ふ」「語る」と言語による教導であると説明し、具體的な言論行爲に焦點化させている。本詩二章は、

我有旨酒

我に旨酒有り

嘉賓式燕以敖

嘉賓式<sup>も</sup>て燕して以て敖す

と言い、卒章は、

我有旨酒

我に旨酒有り

以燕樂嘉賓之心

以て嘉賓の心を燕樂す

と、もてなしを受けた臣下が君主に對してどう行動するかは詩句に觸れられていない。それにも関わらず、嚴祭は二章『詩緝』で、

私は彼と宴をし敖遊しよう。彼の心がゆったりとして楽しみ、我が徳を磨き我が心に染み通る裨益を與えてくれんことを。ただ宴を開き遊ぶだけではない（我與之燕飲而敖遊。庶乎從容款洽、而有磨礪浸潤之益、非徒遊燕而已）

と言い、卒章『詩緝』では、

ただ氣と體を養うだけではない。この宴によって彼の心を樂しませ、思う存分何包み隠すことないようにしてくれることを望むのである（非徒養其氣體也。以之燕飲而樂其心、庶其罄竭而無隱耳）

と言い、「告」「言」という語は用いていないものの、文王が臣下による教導を求めていると解釋して、やはり臣下の「忠告」を念頭に置いていると考えられる。嚴粲は、忠言こそが文王が臣下に求めるものだと認識している。これは前節で指摘した朱熹の解釋を繼承したものと考えられる。<sup>(8)</sup>

もう一つの違いは、黄樵は杜甫の詩を引用しないということである。杜甫の詩を本詩に結びつけること、そしてそこから「用詩の意」について言及することは、嚴粲の独自の説である。

嚴粲は「鹿鳴」で描かれた宴が、文王の臣下を愛する心が自然に行動に表されたものと捉える。宴によらずとも、君臣間には平生から相互理解・相互信頼が構築されている。臣下は宴によって、主君と自分との間の心の絆を實感し、安んじて君主を教え諭し、文王も臣下の教導を心から願っている。このように見ると、嚴粲は朱熹や黄樵の解釋を融合させて、独自の解釋に發展させている。このことと、彼が杜詩を引用したこととはどのように関わっているだろうか。

#### 4 杜詩における「鹿鳴」の典故

杜甫が「自京……」の中で詠った現實の（と言っても杜甫が想像の目で見た）宴においては、君主たる玄宗は贅澤を極めた宴を開き、民から容赦なく收奪した絹を臣下に惜しみなく振る舞う。臣下は宴を飽くことなく享樂し下賜品を無反省に享受する。この詩の中に、時の権力者たちに對する杜甫の批判的意識が込められていることは確かである。それでは嚴粲は、杜甫の批判の矛先は具體的にいったい誰の何に向けられていると考えたのであろうか。

南宋・羅大經『鶴林玉露』乙篇卷二「彤庭分帛」に次のように言う。

杜少陵の詩の……「聖人 筐篚の恩、實に邦國を活せしめんと欲す。臣如し至理を忽せにせば、君豈に此の物を棄てんや」が言わんとするのは、すなわち「爾が俸 爾が祿、民の膏 民の脂なり」ということである（杜少陵詩云……聖人筐篚恩、實欲邦國活。臣如忽至理、君豈棄此物。即爾俸爾祿、民膏民脂之意也）<sup>9)</sup>

また、北宋・趙次公の注に次のように言う。

以上の句はみな戒めの言葉である。君王が賜與した幣帛は、貧しい女性の夫が鞭打たれて年貢として收めたものであることに思いを致すべきである。「責任に」戰慄して國家を活性化させる道を追求すべきで、そうしてこそはじめて仁と云えるのである、と言う（上句皆申戒之辭。謂當思君王賜予之幣帛、出於寒女之夫鞭撻所貢。宜戰慄而求活國之事、然後爲仁也）<sup>10)</sup>

兩説はいずれも、杜甫の言葉は幣帛を下賜された臣下たちに向けられていると捉えている。生き生きとした國家を作り上げるために盡力してほしいという皇帝の思いを受け止めることなく、爲政者としての責任を果たそうとせず、本來その幸福な生を保證する対象であるはずの庶民を自分の享樂のために苦しめている——杜甫は下賜品を受け取った臣下の無自覺を糾弾していることになる。

はたして、嚴祭もそのように解釋しているのだろうか。兩説は詩句に明示的に表現された内容を要約するのみで、それ以外のことは讀み取っていない。この場合、「筐篚」も單に「鹿鳴」に見える由緒正しい語を典故として用いたに過ぎなくなる。さらに、羅大經や趙次公の解釋に據れば、玄宗が絹を下賜したのは國のために盡力してほしいという願いに發するこ

となる。とすれば、それは臣下の盡力という見返りを期待した行爲ということになる。これは、嚴粲によって批判された漢唐詩經學の「鹿鳴」解釋と同じ論理であり、嚴粲の認識にはそぐわない。まして君臣間には平生からの親愛と信頼が存在している、設宴はその思いが自然に表れたものであるという、嚴粲の「鹿鳴」解釋とも齟齬する。

したがって、嚴粲は「自京……」に對して羅大經や趙次公とは異なる解釋をしたと見るべきである。我々は、嚴粲が杜甫を「古人の用詩の意を得たり」と稱賛しているのを出發點として考え直してみよう。彼の言う「用詩の意」とはいったい何であろうか。

杜甫は、理想の君主たる文王の治める御世の有様を美め稱える「鹿鳴」の語を用いて、自分の生きる世の状況を批判する。これは、詩經解釋學にいわゆる「陳古刺今」(あるいは「思古傷今」とも言う)と相似た表現方法である。<sup>11)</sup>陳古刺今とは、詩人が同時代の状況への批判を込めて、あえて古の理想の御世を贊美する詩を作ったとする解釋認識(詩篇の讀者の立場から言えば、詩篇に表現された内容と作者が讀者に伝えようとした思いとの間に乖離が存在していると理解すること、その本義を捉えようとする解釋認識)であるのに對して、本例では詩全體としては杜甫當時の有様を敘述しながら、その中の一語句を、理想の御世を贊美した詩篇から典故として借用しているという點が異なる。ただしいずれにしても、理想的な古と批判すべき今との對照が表現の内と外とに存在することが共通している。

詩經の詩人はその思いや考えをあからさまに表現するのを避け、言外の意として讀者に伝えることを好んだが、「陳古刺今」はそのための重要な手法として用いられたというのは、嚴粲の詩經に對する基本的認識である。<sup>12)</sup>それから考えると、「自京……」についても、古を鑑とする表現の裏に「言外の意」として現實の醜惡さを浮かび上がらせる表現手法が用いられていると嚴粲は考えているのではないだろうか。とすれば、「用詩の意を得たり」という評語は、杜甫が「鹿鳴」の語を用いることによって、言外の意として時代の闇を効果的にあぶり出すことができたことと評價したことを表すと考えることができる。それではその闇とは何だろうか。

嚴粲は、「鹿鳴」においては文王とその臣下の間に平生から親愛と信頼の關係が確立されているということを強調する。

宴と引き出物は、文王の臣下に對する親愛の念が自然に發露したものであり、臣下はそれにより君主の信頼を實感し、忠義の心から文王に忌憚なく自分の考えや意見を披瀝し、文王も彼らがそうしてくれることを心から求めている。詩人はそのようなるわしい君臣關係を實現した文王を美め稱えている。このように、「鹿鳴」は臣下ではなく、君主のあるべき態度を主題とした詩である。そして、「自京……」が「鹿鳴」の語を陳古刺今として用いた、すなわち「鹿鳴」のネガの世界であるとすれば、杜甫の視線も君主、すなわち玄宗に向けられていると捉えるのが自然である。

つまり、杜甫は臣下ではなく天子を問題にしている。もっぱら臣下の振る舞いを問題にしているかのように見える詩句の裏側には、君臣間の眞の親愛を基盤としない馴れ合いとしての宴を開催し、民から收奪した絹を漫然と下賜品として振る舞うのは、「鹿鳴」に描かれる君臣の義を見失つたものである、という玄宗皇帝に對する批判が込められているということになる。「然る後に忠臣嘉賓其の心を盡くすを得」の「得」にこそ重大な意味があると言つて、それに續けて杜詩を引いた嚴粲の意圖は、その場限りの豪奢なもてなしをすれば、その見返りとして臣下は自分のために盡力してくれるだろうと期待するのは誤りで、平生からの地道な心配りにより、臣下が顧慮することなく諫言できるような信頼關係を築き上げなければならないと杜甫は言おうとしている、と主張するところにあるのではないだろうか。

詩經の詩人が主君を直接批判することを憚つたが故に、あえて第三者を批判することでその言外に主君への批判の思いを込める、という理解は嚴粲の詩經解釋に頻出する。<sup>13</sup> そして詩人がそのような表現方法を取つたのは、彼らが「優柔」「心柔」らかで穩やかな表現を好むという性格を持つていたからだ、と嚴粲は考える。<sup>14</sup> 嚴粲は、杜甫もそのような性格を詩經の詩人たちと共有していたが故に、彼らと同じような表現方法を「自京……」においてしたと考えたのではないだろうか。また、杜甫が「鹿鳴」の語句を用いることによって自分の眞意を「言外の意」として表現することに成功したと考えたが故に、嚴粲は「古人の用詩の意を得たり」と稱賛したと考えることができるのではないだろうか。

南宋・蔡夢弼『草堂詩箋』に次のように言う。



思うに「聖人 筐篋の恩」とは、みだりに褒賞を與えるのに務めるのではなく、實に國家の民を無事に生活させるために、忠臣にその心を盡くすことができるようにと願つてのことである。今、玄宗は聚斂の臣下に民を鞭で打つて嚴しく取り立てさせた物を、功績のない者に分け與えてこれを受け取らせるのは、その「邦國を活せん」との道理をおろそかにしたものである。主君の下賜がみだりに行われるというのはこの「筐篋の恩」を棄て去るものである。朝廷に居竝ぶ臣下はこのことで主君を諫めようとする。ただ仁者のみが變事が起こることを豫測して、それ故に國家のために戰慄するのである（蓋聖人筐篋之恩、非苟務爲濫賞、實欲忠臣得盡其心、存活邦國之民而已。今玄宗使聚斂之臣鞭撻誅求、分賜無功而受此者是忽其活邦國之理也。君所賜僭濫是棄此筐篋之恩也。多士盈庭無敢以此諫君。惟仁者測其有變、所以爲國家戰慄也）<sup>(15)</sup>

また、清・黃生『杜詩說』に次のように言う。

もともと朝廷が節度なく褒美を下賜するのを諷刺する。しかしながら、その咎を臣下が主上からの賜り物を無駄に費やしていることに負わせたのは、言語表現のあり方を深く體得したものである（本諷朝廷賞賚無節。然但歸咎臣下虛糜主上之賜、深得立言之體）<sup>(16)</sup>

と言う。これらは、杜甫の批判が玄宗に向けられていると考える點で嚴粲と共通している。

さらに想像を逞しくすれば、嚴粲の考えでは文王が臣下に何よりも求めたものは自分に對する忠告である。とすれば、玄宗がそれを眞劍に求めようとなしないうことも批判の理由だったということになるかもしれない。とすれば、杜甫は玄宗が自分のような言論の臣を重んぜず、媚び諂う高官のみを厚遇することを批判したと、嚴粲は考えていたとも言えるのではないだろうか。

## 5 大雅「桑柔」二章

以上の推論の傍證とあるいはなるのではないかと思われる例がある。大雅「桑柔」『詩緝』における杜甫詩の引用である。大雅「桑柔」は、暴政により西周の民を塗炭の苦しみに陥れた厲王を刺った詩である。<sup>17</sup> その二章『詩緝』に次のように言う。

本章「四牡 駉駉たり、旗旒よてうへん翩たる有り」の二句について、ある學者は厲王が征伐を行った事績がないとし、ついにこれを使臣が道路に奔走している様を詠ったと考證した。しかし、本詩の言わんとするところを味讀すると、まさしく戦争を厭惡し戦争に困苦していること、杜甫が「兵車行」に「車は麟麟、馬は蕭蕭」と詠ったのと相似る。「上掲の二句の」後に「國として涙ほろびざる靡なし」と言うところから、諸侯がお互いに攻撃し合っていることがわかる（四牡駉駉、旗旒有翩、或考厲王無征伐之事、遂以爲使臣奔走於道路。然味詩之意、政是厭苦兵革、如杜甫所謂車麟麟、馬蕭蕭。下言靡國不涙、知爲諸侯相攻矣）

「桑柔」が馬車を引く四頭の牡馬が休むことなく走る様とハヤブサや神獸の刺繡を施した旗印が風にはためく様を詠っているのと、「兵車行」が疾走する兵車の音と軍馬の嘶きを詠っているのが、具體的事物によつて全體的情景を浮かび上げらせている點で共通するのは容易に看取できる。だが、嚴粲が杜甫を引用した目的はそれだけだったのであろうか。「詩の意を味ふに、政まつらに是れ兵革を厭苦す」と言い、それが杜詩の「車麟麟、馬蕭蕭」と同様であると言っている點に注目すれば、杜甫のこの二句には「兵革を厭苦す」る「意」があると嚴粲は考えていることになる。「桑柔」と「兵車行」の當該句は情景を描寫した句でありながら、戦争への呪詛が込められている、すなわちこの二首は「言外の意」による表現の次元で共通することを指摘し、それを根據に「ある學者」の説を却けているのである。そこにはいったいどのような論理が働いているのであろうか。

「兵車行」の「車隣」は秦風「車鄰」の、

有車鄰鄰 車有り鄰鄰たり

有馬白顛 馬有り白顛なり

を、「馬蕭蕭」は小雅「車攻」七章の、

蕭蕭馬鳴 蕭蕭として馬鳴いななきき

悠悠旆旌 悠悠として旆旌はいせいあり

を典故とする。「車鄰」は小序に據れば、秦の興隆の基礎を作った秦仲を贊美した詩である。<sup>(18)</sup> 嚴粲は當該二句について、

秦仲ははなはだ多くの車を持っている。その車はびっしりと居竝んでいる。<sup>(19)</sup> 多くの馬を持っていて、その中には白い額あごの馬がいる。一頭を擧げてその他を暗示させる（秦仲有車甚衆。其車鄰鄰然密比。有馬甚多。其中有白額之馬。舉一以見其餘也）

と言い、車馬の見事さと多さを詠うことよって秦仲よって秦が富強になったことを表していると考ええる。

「車攻」は小序に據れば、西周の中興の天子宣王が古の制度を復活させ、軍隊を整備し、諸侯を集め、戦争の演習を兼ねた田獵を執り行ったことを贊美した詩である。<sup>(20)</sup> 嚴粲は當該二句について、

田獵が終わり、軍隊はその後歸還していった。見物していた者にはただ馬がヒヒーンと靜かに嘶く聲が聞こえるばかりで、それ以外の物音はしない。旗指物を立てた軍隊が悠々と緩やかに列を亂すことなく移動していくのが見えるばかりである（田事既畢、軍旅旋歸。觀者唯聞馬鳴之聲蕭蕭然而靜。無他聲也。見旌旆之行悠悠然而緩、無亂次也）

と言い、田獵が滞りなく終了し、喧騒が収まり靜寂を取り戻した情景を詠っていると解釋する。つまり、杜甫が典據とした兩詩は明君のもとで軍隊が完備し秩序立っている様を贊美した句となる。ところが、「兵車行」は玄宗の發動した戦争が人民を困苦に陥れていると告發する。つまり、杜甫の「車は隣隣、馬は蕭蕭」は、古の君主を贊美した詩篇の句の含意を轉換させて、すなわち陳古刺今的手法を用いて今の君主を批判していると、嚴粲は讀解しているのである。

それでは「桑柔」はどうであろうか。「四牡 騤騤たり」は、小雅「采薇」<sup>(21)</sup>五章に、

駕彼四牡 彼の四牡に駕す

四牡騤騤 四牡 騤騤たり

とあり、『詩緝』は、

あの四頭の牡馬の引く馬車に乗り、四頭の牡馬は休むことがない。この兵車は將帥が乗り込むもので、兵卒がそれに従って行動するものである。將帥と兵卒が心を通わせていることがわかる（駕彼四牡、其四牡騤然不息。此戎車者將率之所依止、戍卒之所從動。帥乘輯睦可知矣）

と言う。「旗旒翩たる有り」は、小雅「出車」二章に、

彼旗旒斯

彼の旗旒あり

胡不旆旆

胡ぞ旆旆たらざらん

とあり、『詩緝』に、

波の旗指物はひらひらと風に靡かないということがどうしてあろうか。みなひらひらと靡いていると言う。軍隊の様子が非常に盛んなのである（彼旗與旒、何有不旆旆然飛揚者乎。言皆旆旆然飛揚。軍容甚張也）

と言う。嚴粲は「采薇」序の『詩緝』に、

「采薇」「出車」「杕杜」などの詩篇は、周が興隆した所以を詠ったものである（采薇出車杕杜諸詩、周之所以興也）

と言い、「采薇」「出車」兩詩を、周の國を興隆させた文王が異民族の脅威を却けるために軍隊を派遣し、また歸還した軍隊をねぎらった詩と考えている。この解釋を援用すれば、「桑柔」の作者は暴虐な厲王が起こした無益な戰爭に驅り立てられる軍隊の様を描寫するのに、あえて理想の御世における軍隊の偉容を贊美する詩篇の語句を用いたということになる。

「桑柔」と「兵車行」とはいずれも古の軍隊を贊美する詩の語句を用いて亂世の軍隊を描寫し國家の衰運を印象づける、陳古刺今の手法を用いることで共通する。嚴粲はこの兩詩において、典故とされた詩句とそれを用いた詩句との間に強烈な明暗の對比を感じ取り、そのコントラストによって現狀を批判しようという作者の思いを見出したのであろう。故に、彼は「桑柔」が戰爭に關する詩ではないとする說に對する反證として「兵車行」を引用し、兩詩の表現の共通性を指摘したと

考えられる。

このような筆者の推測が正しいとすれば、詩經の詩人がすでに古の美詩の語句を用いて、言外の意として自身の時代に對する批判の思いを表現する技法を身につけていたと、嚴粲は考えていたことになる。その場合、「桑柔」は、彼が「鹿鳴」注で言う「古人の用詩」の例となる。とすれば嚴粲は、杜甫が「自京……」で陳古刺今的表現をしたのは詩經の詩人の表現方法をよく學んだ成果であるとして「古人の用詩の意を得たり」と稱賛したのではないかという、筆者の推論を裏付けるものとなるのではないだろうか。

## 6 まとめ

嚴粲は杜甫が陳古刺今的表現を詩經の詩篇から學んだと考えた、と右に述べた。詩經と杜甫の時代關係から言えばそうなるし、また古典中國の普遍的認識として詩經が詩歌の源泉であり詩經の詩人が最高の存在であったことから言っても、そう捉えるのが自然である。嚴粲自身もそのように意識していたであろうことは、その「古人の用詩の意を得たり」の評語から窺われる。

しかし、嚴粲の思考の流れを考えた場合、逆の見方でもできるのではないだろうか。詩經の詩人がいかなる思いや意圖を持って詩篇を作り上げたか、いかなる表現の方法によつてその思いや意圖を傳えたかは、詩篇をどのように解釋するかによつて大きく變わる。まして言外の意として思いや考えを込める手法については、そもそも詩句に言外の意があるのか、さらにはいかなる言外の意がどのように込められているのかは、解釋者の立場や解釋のしかたによつて千差萬別となるだろう。とすれば、個別の詩篇の詩句を分析的に解釋することによつてその答えを導き出すだけではなく、そもそも最高の詩人たる詩經の詩人はいかなる思いをいかに表現するものかについての見方が、解釋者の思考の基層に豫め存在していて、その見方に個別の詩篇の詩句を當て嵌めながら解釋するというあり方も必要となつたのではないか。簡單に言えば、解釋者は表現者の人格のプロトタイプをまず腦裏に浮かべて詩篇を解き明かそうとしたということである。

嚴粲は杜甫を尊崇していた。<sup>(2)</sup>とすれば彼の自覺がどうであれ、その詩經解釋において事實上杜甫は表現者のプロトタイプとして機能していたのではなからうか。「柔柔」における「四牡」「出車」の語句の用い方に關する彼の解釋は、杜甫の「兵車行」から發想されたとも考えることができるのではないだろうか。彼にとつては、詩經によつて杜詩を讀むことと、杜詩によつて詩經を讀むことが分かちがたく結びついていたのではないだろうか。

註

- (1) 『毛詩正義』以下、『正義』に「言羣臣嘉賓者、羣臣、君所饗燕、則謂之賓。序發首云燕羣臣、則此詩爲燕羣臣而作。經無羣臣之文、然則序之羣臣、則經之嘉賓、一矣。故羣臣嘉賓并言之、明羣臣亦爲嘉賓也」と言うのに據り、「羣臣」と「嘉賓」が同じ對象を指しているとして解釋した。『詩緝』も、「儀禮註云、鹿鳴君與臣下及四方賓燕之樂歌也。故序以羣臣嘉賓兼言之。詩不言羣臣、唯言嘉賓、則總謂羣臣爲嘉賓、以禮待臣之厚也」と言い、『正義』の説に贊成する。
- (2) 清・仇兆鰲『杜詩詳注』卷四（中國古典文學基本叢書、中華書局、一九七九——以下、「排印本」と略稱——）二六九頁。
- (3) 洪業他撰『杜詩引得』（上海古籍出版社、一九八三影印本）上册所收、三八頁。
- (4) 文淵閣四庫全書本に據つた。
- (5) 小雅「都人士」首章の「行歸于周」の毛傳に「周、忠信也」と言うのに基づく。
- (6) 通志堂經解本。
- (7) 『儀禮』「鄉射禮」に「古者於旅也語」とあり、その鄭玄注に、「禮成樂備、乃可以言語、先王禮樂之道也。疾今人慢於禮樂之盛、言語無節、故追道古也」と言うのを参考にし、嚴粲が「燕禮」と言っているのは『儀禮』の篇名を指すのではないと考えた。
- (8) 本詩首章『集傳』に、「周行、大道也。古者於旅也語。故欲於此聞其言也」、二章『集傳』に「蓋所以致其慇懃之厚而欲其教示之無偷薄、而君子所當則倣、則亦不待言語之間而所以示我者深矣」と言い、卒章『集傳』に「蓋所以致其慇懃之厚而欲其教示之無已也」と言う。
- (9) 『鶴林玉露』（王瑞來點校、唐宋史料筆記叢刊、中華書局、一九八二）一五〇頁。ここで紹介される詩句は、南宋・王十朋「州縣

- 有戒石飭官吏某至夔之初□□□□詩以自警云」（『全宋詩』卷二〇三五、北京大學出版社、第三六冊、二二八二四頁）に見える。
- (10) 林繼中輯校『杜詩趙次公先後解輯校修訂本』（中華古典文學叢書、上海古籍出版社、二〇一二）上冊一〇四頁。
- (11) 「陳古刺今」「思古傷今」については、拙著『詩經解釋學の繼承と變容——北宋詩經學を中心に据えて——』（研文出版、二〇一七）第十四章「詩を道徳の鑑とする者——陳古刺今説と淫詩説から見た詩經學の認識の變化と發展——」を参照のこと。
- (12) 小雅「頍弁」「詩緝」に「國風小雅多寓意於言外……有言古不言時而意在刺時者」と言う。
- (13) 拙論「篡奪者に獻げる讚歌——類淫詩説を廻る朱熹・嚴粲と戴震・翁方綱との關係——」（慶應義塾大學日吉紀要『中國研究』、第十二號、二〇一九）他参照。
- (14) 拙論「より深く潛水しより自由に游泳するために——嚴粲詩經學における小序尊重の意義 その二——」（慶應義塾大學日吉紀要『中國研究』、第十一號、二〇一八）他参照。
- (15) 曾祥波新訂輯證『新定杜工部草堂詩箋輯證』（中華古典文學叢書、上海古籍出版社、二〇二二）第一冊一六七頁。
- (16) 『杜詩説』（『黃生全集』貳、安徽大學出版社、二〇〇九、三一頁）。なお、仇兆鰲『杜詩詳註』、浦起龍『讀杜心解』にも同様の解釋が見える。
- (17) 「桑柔」序に「芮伯刺厲王也」と言う。
- (18) 「車鄰」序に「車鄰、美秦仲也。秦仲始大、有車馬禮樂侍御之好焉」と言う。
- (19) 「鄰鄰」について、『詩緝』雙行注は毛傳の「鄰鄰衆車聲」を挙げつつも、その後に曹粹中『放齋詩説』の「密比之意。言車之衆」を引き通釋もそれに従っている。
- (20) 「車攻」序に「車攻、宣王復古也。宣王能內脩政事、外攘夷狄。復文武之境土、脩車馬備器械、復會諸侯於東都、因田獵而選車徒焉」と言う。
- (21) 「采薇」序に「采薇遣戍役也。文王之時西有昆夷之患。北有獫狁之難。以天子之命命將率遣戍役以守衛中國。故歌采薇以遣之、出車以勞還、杕杜以勤歸也」と言う。
- (22) 南宋・戴復古「祝二嚴」に、嚴粲について「遍參百家體、終乃師杜甫」（『石屏詩集』卷一、四部叢刊廣編）と言う。

\*本稿は、蔣經國國際學術交流基金會補助（一百零八年度第二期）による共同研究「作為方法的『言外之意』——結合《詩經》尊〈序〉與廢〈序〉的態度比較」の成果である。